

医師、看護師の仕事体験

川崎医科大学子ども教室

災害想定 応急処置学ぶ



災害で負傷したとの想定で応急手当を体験する子どもたち

子どもに医療や福祉への興味を持ってもらおうと、川崎医科大学(倉敷市松島)は20日、構

内で「夏の子ども体験教室」を開いた。県内の小中学生約80人が、実際の医療器具を使うなどして医師や看護師の仕事を経験した。

同大教授らの講演や付属病院の見学で知識を深めた後、特殊なメスを実際に使う外科手術や注射器の扱い方などの4コースに分かれて体験した。

災害を想定して負傷者の応急処置を学ぶコースでは、けがの状態

で治療の優先順位を決めるトリアージや止血法などを経験。子どもたちは専門家に教わりながら、救急隊や看護師、医師役を務め、保護者が扮する負傷者に「歩けますか」「どこを痛めていますか」などと負傷具合を確認して搬送の優先度を判断。ガーゼで止血したり骨折した腕を添え木で固定したりした。

倉敷市立東陽中3年高浜有佐さん(15)は「医療は的確で迅速な

判断が重要だと分かった。大変だが、命を救う重要な仕事だと改めて実感した」と話した。

体験教室は2009年から続く人気行事で、今春に文部科学大臣表彰(理解増進部門)を受けた。21日にも事前申込者を対象に実施する。(山本真慈)

判断が重要だと分かった。大変だが、命を救う重要な仕事だと改めて実感した」と話した。

体験教室は2009年から続く人気行事で、今春に文部科学大臣表彰(理解増進部門)を受けた。21日にも事前申込者を対象に実施する。(山本真慈)